【用語】大根―新田郡新田町　土貢―田租のこと　折檻―厳しく意見を加えること　穿鑿―どこまでも調べ立てること　忿劇―あわただしい、多忙　至極―きわめて、この上なく　風干―風害と干害　庄務―荘園の事務をする人　検見―検査すること

【解説】太田の金山城は、岩松家純が文明元年（一四六九）に築いたといわれ、戦国時代には上杉氏と北条氏の抗争のはざまで由良氏が威勢を振るっていた。この由良氏に従属していた世良田の長楽寺は、承久三年（一二二一）新田氏一族の徳川義季を開基、栄朝を開山とし、南北朝・室町時代には臨済宗五山派の有力寺院として発展した。その後、由良氏から寺領として平塚・八木沼・大根郷を安堵され、由良氏の家臣団と同列の地位にあったといわれるが、戦国期から近世初頭にかけては著しく衰微したようである。

この文書は、北条氏との合戦に敗れた金山城主由良国繁が、城を明け渡して桐生城へ退去したのちの天正十五年（一五八七）十一月、長楽寺領であった大根郷の年貢争論に関するものである。内容は、大根郷の百姓が年貢の徴収に応じなかったため、由良氏が寺からの要請で百姓前を取り上げ長楽寺の小作前に落とした。その後、百姓側から長楽寺に取りなしがあったので、その処置は長楽寺に任せることにし、改めて大根郷の年貢の徴収割合を示したものである。この文書から由良氏と長楽寺及び寺領農民の関係の一端がうかがえる。なお、長楽寺文書は国指定の重要文化財である。